

国文学研究資料館ニュース

No.7
Spring
2007

『扇の草紙』

目次

- | | |
|---------------------------|-----------------------|
| ■ いよいよ立川市への移転間近……………2 | ■ 大学院教育……………6 |
| ■ お知らせ……………3 | 日本文学研究専攻に第1号の博士(文学)誕生 |
| 立川移転にともなう資料利用サービスの休止について | ■ 海外往来……………7 |
| 春季特別展示 | 日伊学術交流協定に基づく特別講義 |
| ■ トピックス……………4 | ■ コラム「ふた昔余り」……………8 |
| 海外の日本文学研究者との懇談会 | |
| 日本古典籍講習会 | |
| ライデン大学(オランダ)文学部と学術交流協定を締結 | |

いよいよ立川市への移転間近



新施設イメージ図

交流アトリウム



国文学研究資料館は、平成20年4月に、現在の品川区豊町から立川市緑町に移転してオープンします。立川の新施設は、これまでより設備を拡充し、利用する方の利便性の向上を図っています。

入口を入るとすぐにあるのが交流アトリウムです。3階まで吹き抜けて開放感のある構造になっています。利用者の休憩場所などが設けられます。

新しい閲覧室では、広々としたスペースを活用して、図書、雑誌、紙焼写真本など開架図書を大幅に増やし、利用者の利便性の向上を図りました。また利用者は、広いスペースでゆったりと資料を閲覧できます。

以上のほか、拡充した展示室での通常展や企画展の開催、バリアフリー対応など利用者の利便性を考慮した施設となっています。

※図はすべてイメージです。

閲覧室



表紙絵解説 扇の草紙（おうぎのそうし）

江戸初期写 卷子本。扇面図30の上下に、対応する和歌を散らし書きした絵巻。6紙を継いだもので、各紙に、扇面図5と対応する和歌5首を添える。金欄梅紋唐草模様表紙。料紙は上質鳥の子紙で、金泥・銀泥・丹を豊富に使用した豪華本。

お知らせ

立川移転にともなう資料利用サービスの休止について

平成19年10月から平成20年3月まで、移転のため閉室いたします。

当館は平成20年4月、立川市に移転します。つきましては、移転準備のため、資料利用サービスを以下のように休止いたします。この間、日本文学部門と歴史部門を合わせ、図書を再編成し、磁気テープを装着するなどの作業を行い、開架書架を増やし、使いやすい閲覧室に向け、準備を進めます。

平成20年4月からは、立川市緑町（最寄駅は多摩モノレール高松駅）で開室しますので、皆様には大変ご迷惑をおかけしますが、何とぞご理解をいただきますよう、お願いいたします。

サービス種類	サービス最終日
来館利用(閲覧・来館文献複写受付・他)	平成19年9月28日
資料撮影	
資料掲載翻刻申込受付	平成19年10月31日受付分まで
展示貸出受付(11月30日までに資料を返却のこと)	
相互利用(文献複写受付・図書館貸出)	
郵送・FAX等による文献複写受付	
その他所蔵資料に関わるサービス	

平成19年度 閲覧室カレンダー

青字は休業日

H19(2007/4)月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

5月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

6月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

7月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

8月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

9月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23 /30	24	25	26	27	28	29

閲覧 9:00～18:00 閲覧請求 9:30～12:00、13:00～17:00
複写受付 9:30～16:00

平成20年4月から開室し、平成20年5月には特別展を開催します。

※上記スケジュールが変更になる場合は、本紙及びホームページ等で随時お知らせします。

春季特別展示

幻の博物館の“紙”

ー日本実業史博物館旧蔵コレクション展ー

幻の「日本実業史博物館」資料のうち、「紙・製紙」に関するものを展示します。また、国立民族学博物館の資料を借用して展示する予定です。

期間：平成19年5月28日(月)～6月15日(金)

場所：国文学研究資料館 2階展示室



トピックス

●海外の日本文学研究者との懇談会

昨年度から海外の日本文学研究者を招き、その国における日本文学の研究状況等を伺いながら、意見や情報を交換し、研究者相互の継続した国際交流・研究交流を展開することを目的とした懇談会を開催しています。

第4回目は、8月24日に、南方学院華人族群與文化研究所長の鄭良樹氏をお招きしました。同氏は現代中国文献学の第一人者であり、懇談会では、中国の清代に学問として確立された「校勘学」をご紹介くださいました。

「校」は原テキストの各版を読み比べること、「勘」は文法及び当時の文化・習慣をテキスト解説の礎とすることを意味しており、この二つの手法によって複数存在するヴァリエントを対照・



鄭良樹氏

比較し、正確な原本の姿を求めようとするのが「校勘学」であるということを、参加者に語ってくださいました。

日本では「校勘学」が組織立った学問として成立するには至らなかった経緯があり、参加者は新鮮な思いで中国独自の文学理論である「校勘学」についての、熱のこもった解説に耳を傾けました。



第5回目は、11月30日に、北京外国語大学北京日本学研究センター教授の曹大峰氏をお招きしました。

氏の母校であり、現在の勤務先でもある北京日本学研究センターは、当初、科目研究や教材研究を目指していましたが、近年日本文学の研究へと重点を移してきました。古典文学の研究では、研究のための辞典の作成に着手し、完成時は中国の日本文学研究者から大変



曹大峰氏

感謝されたそうです。

最近は日本文化に焦点を当て、日本の思想史、高齢化社会の研究が進み、更に日本の国立情報学研究所と提携し、日本に関する資料のオンライン化・目

録化を実現し、情報研究に着実に成果を上げています。

寒い季節の懇談会開催となりましたが、氏の温厚なお人柄が、聴く者を暖めるようでした。



第6回目は、12月13日に、元オーストラリア国立大学教授のロイヤル・タイラー氏をお招きしました。同氏は、近年『源氏物語』の全訳を刊行されたことで有名ですが、能楽翻訳の第一人者でもあり、深く内容や登場人物の心理に踏み込んだ文学的香気溢れる「タイラー訳」は、絶大な評価を得ています。

聴講者のほとんどが『源氏物語』を日本語で読解することが出来るため、懇談会では、原文では主語のない文章を氏がどのように翻訳したかなど、世界文学としての『源氏物語』翻訳の苦労話に花が咲きました。限られた時間



ロイヤル・タイラー氏

ではありましたが、氏の流暢な日本語で貴重なお話を伺い、日本語で『源氏物語』を研究しているだけでは得られない体験をすることが出来ました。



第7回目は、1月31日に、マドリッド・アウトノマ大学助教授の高木香世子氏をお招きしました。同氏は、スペインにおける日本文学研究の第一人者であり、数々の日本文学作品のスペイン語訳・出版に携わって来られました。

現在のスペインにおける『源氏物語』の出版状況が、外国語版の重訳による翻訳のため本来の姿から離れてしまっている中で、「世界文学の中で名著とされている『源氏物語』とはなにか」を求めて、「古典語を外国語に翻訳する」という難しい作業に取り組んでおられます。

今、スペイン語圏は世界中で広がり続けており、日本文学・文化を世界に広めていく上で『源氏物語』のスペイン語訳は大きな課題の一つである、とのお話を伺うことが出来ました。



高木香世子氏

また、先生のご専門である『竹取物語』の研究と、『源氏物語』との関連性、特に作り物語としての側面や、ジェンダー研究からの視点によるお話を伺い、出席者との意見交換や情報交換、世界的な視点から見た現在の日本文学・文化のありよう、日本文学研究の課題など、とても貴重なお話を伺うことが出来ました。

●日本古典籍講習会

平成19年1月17日(水)から19日(金)の3日間、国立国会図書館で開催されました。日本古典籍講習会は、日本古典籍の整理・目録化を促進し、広く活用されるよう環境の整備を図るために、書誌学の専門知識や整理方法の技術修得を目的として、各所蔵機関の図書館員等を対象として、平成15年度から開始したもので、今回で4回目となり、平成17年度からは、国立国会図書館との共催で開催しています。16年度以降は、国内の図書館員等を対象に3日間開催し



講習会の風景

ています。今回の講習会には、大学図書館22名、公共図書館10名、計32名の方が受講しました。

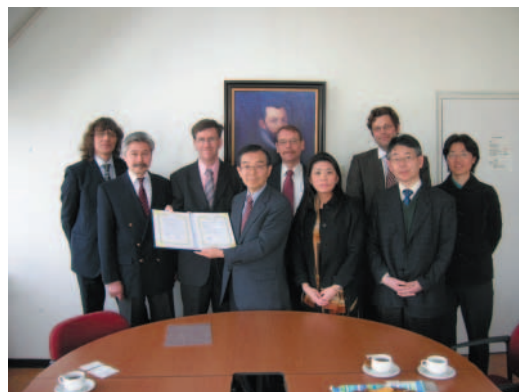
内容は、日本古典籍の基礎知識、和古書目録の作成、データベース化の方法、近世の出版と流通、くずし字の読み方、蔵書印の見方・読み方などの講義、当館及び国立国会図書館の和古書目録規則の説明、古典籍資料の保存・管理法、貴重書紹介、書庫の見学などでした。

終了後のアンケートでは、「講義、演習、実習とバラエティに富んでいて良かった。基礎からの講習だったので、理解しやすかった。」「実物の資料を見せながら、実践的な内容だったので、非常にわかりやすく、学んだことをすぐに生かせると感じた。」「このような講習会は是非続けてほしい。」などの意見があり、たいへん好評でした。

●ライデン大学（オランダ）文学部と学術交流協定を締結

平成19年3月19日、ライデン大学文学部学部長G・ボーイ教授と、伊井館長との間で学術協定の合意文書の交換がライデン大学にて行われました。

ライデン大学文学部は、世界でも有数の日本文学及び漢籍の貴重書コレクションを所蔵しています。また、オランダ国立博物館及びオランダ国立民族学博物館とも密接な関係を持ち、今回の協定合意によって、学術研究分野における共同研究、オランダ・日本におけるコレクションの公開、研究者及び博士課程の学生の交流、相互の研究支援などが行われる予定です。



ライデン大学（オランダ）にて

大学院教育

●日本文学研究専攻に第1号の博士（文学）誕生

2月23日に開かれた総合研究大学院大学文化科学研究科の教授会において、日本文学研究専攻大内英範君（平成15年度入学、第1期生）の学位認定がなされ、博士（文学）を授与されることが決まりました。学位論文は「源氏物語鎌倉期本文の研究」で、緻密で詳細な分析手法とそれによる独創的な研究成果が高く評価されました。鎌倉期写本に焦点を絞り、その本文及び書写態度や方法を綿密に分析するという手法を確立し、祖本ともいべき本文を推定し、一定の結論を得ています。現存する写本間の関連を、通常の手法である横の関連から分析することに加え、さらに写本間の前後関係ともいべき縦の関連に着目し、これに充分実証性のある分析方法を提唱し、地道な努力を重ねて結果を出した点が注目されました。

本人はもとより、私ども専攻担当教



公開学位論文審査会での論文発表風景

員一同、大変うれしく喜ばしいことと思っております。また、日々ご指導、ご協力をいただいた国文学研究資料館の先生方、事務の方々に深く感謝申し上げます。

これにより、日本文学研究専攻も今後は論文博士も受入れるなどの資格も得られ、益々の発展が期待されます。

海外往来

●日伊学術交流協定に基づく特別講義

2006年（平成18年）3月、イタリア国立大学等（3大学と1研究機関）と学術交流協定を締結しました。この事業の一環として、同年10月に安永尚志教授をイタリアに派遣し、特別講義と討論会を行いました。安永教授にその様子を書いていただきました。

ナポリ東洋大学では、特別講義及び討論会を、由緒あるコリリアーノ宮第四広間（写真1）において、院生、学生、教職員約40名の参加を得て開催した。特別講義「情報文学論」を1時間半程行い、引続き討論会を行った。参加者は、主に日本語教育学、日本学、文学、歴史などが専門であるが、情報学と文化の結びつきに関心が高く、また目録、原本等の資料がインターネットによりすぐ手にはいること等に驚きを示した。他にeラーニング等についても活発な討議があった。シルヴィオ・ヴィータ教授、シルバーナ・デ・マイオ氏他大勢の方々にお世話いただいた。深謝申し上げます。

ヴェネツィア国立大学「カ・フォスカリ」では、ここでも由緒あるヴェンドラミン宮サロンA（写真2）で開催した。会場は立席状態の80余名の院生、学生、教職員が参加した。分野もナポリ東洋大学とほぼ同じで、講義もほぼ同様である。討論会は、極めて白熱し、様々な課題について2時間を超えて討議した。特に、eラーニングによる日本文学研究に関心が集まった。ボナベントゥーラ・ルベルティ教授を始めとして、多くの方々のお世話になった。深く御礼申し上げます。

今回の学生にとっての特別講義と討論会は、初めて日本からの現役教員による最新の日本文学研究に触れる機会となった。このことの新鮮さ故の興味を喚起し、大きな刺激となり、大変有効であることが、後での教員等との討論でも再認識された。

また、フィレンツェ大学において、次期計画の検討を行い、特別講義の継続、課題を決めたシンポジウム、研究生や日本文学研究専攻への受入れ、学生、教員の相互訪問または共同研究等について協議した。

今後とも継続した事業の展開が望まれる。



安永尚志教授



ナポリ東洋大学でのポスター



コリリアーノ宮第四広間（写真1）



ヴェンドラミン宮サロンA（写真2）

コラム

ふた昔余り

名誉教授 安永尚志

現在、国文学研究資料館では第七期の情報システムが動いている。第二期の情報システムからお守りをしてきたが、その間4、5年置きに更新をした。今の政府調達では2年越しの更新作業を強いられるが、当時でも1年は要した。これに前準備の1、2年を入れると、ほとんど数年ごとに更新作業を実施していることになる。結構しんどい仕事である。

この20数年は、コンピュータにとってはまさしく激動の時代で、それを用いる利用者環境も激しく変化せざるを得ない。それを睨んで5年先を先取りする次期計画にずっと悩まされていた。ふた昔前の大型コンピュータでは、日本語処理としてようよう入力と打出しができた。日本語ワープロは未発達。パソコンなどの兆しもない。入力は漢字タブレット（2000字程度が盤面に整然と並んでいる）から文字を拾うことから。印字はドット方式で、当時の最新のレーザプリンタ（畳1枚を超える床面積に人の背丈くらいの鉄箱。当然極めて高価）で、10ポイント程度の文字を64×64ドットで作った。まさしく文字も手作りの時代で、かつ職人技でもあった。大型機は計算ではなく文字処理（データ処理）に使うが、すべて手作りのプログラム。例えば、データの修正は基より、目録を作る版下原稿を作るなどなど。

そこへ、データベースが登場した。その効果は計り知れない。データベー

スは、例えば目録の各項目を単独で処理、管理できる。レコードが構造を持って記述できる。これは今では常識であるが、当時は画期的であった。日本語をデータベースとして扱う試みとその実用化は、国文学研究資料館から始まったと言っても過言ではない。1980年中頃には世界に先駆けて日本語データベースのオンラインサービスが開始されている。

これは多くの方々の労苦の積み重ねによるものである。多くの課題も何とか解を得てきた。文学研究のための情報検索に求める本質的な課題、外字を含む文字の取扱い、データの一貫性の保証、網羅性の確保のための戦略などなど。例えば、こんなこともあった。研究論文の検索のためのキーワードを考えてみる。「中原中也」を検索する。当時は漢字が直接入力できない。「読み」が必要だ。「ナカハラナカヤ」と読みを振った。間違いだとひどく怒られた。「読み」は検索のための語彙と主張したが、なかなか理解が得られず、データであるとしてかなり論争が続いた。複数の読みデータを入れることも頑固に否定された。検索としての解は、キーワードに揺れを含めることだが、当時は技術的、資源的にも余裕はなかった。現在、「読み」はデータとして記述されている。

今日、国文学研究資料館のデータベースは30種に迫る。しかも、文字や画像など多様な情報によるデータベースが公開されている。

本当に、隔世の感である。



国文学研究資料館ニュース No. 7

発行日 平成19年 4月27日
編集 広報委員会
発行 人間文化研究機構 国文学研究資料館
National Institute of Japanese Literature
〒142-8585 東京都品川区豊町1-16-10
TEL:03-3785-7131 Fax:03-5751-7166 <http://www.nijl.ac.jp>
印刷所 有限会社 スミダ

©人間文化研究機構 禁無断転載

当館では、古典籍及び図書の寄贈を受け付けております。御刊行・御所蔵の資料を広く研究に活用させていただくために、皆様のご協力をお願いいたします。

研究を活性化するために

松野陽一前館長から何度か呼び出されたことがあった。「この国文学研究資料館の大事な仕事は調査と収集だが、加えて、収集した本文をどう提供していくかということがある。」と言われる。調べて集めて提供する。その提供もリクエストがあればコピーを送るというものではなく、館として提供すべき本文を定め、積極的に提供するというものだ。退官されるときには、新古典文庫構想という言葉にもなっていたように思うが、国文学研究資料館に国文学研究者がこれだけ大勢いるという事実を考えると、できないことはないようにも思われる。

ただ、常に難しいのは、国文学研究資料館という機関に対しては、館内にいる我々の想像を超える期待と権威の想定があるという意見があり、そこに想定される一定の権威に対応する本文の認定の問題があるのである。冊子の翻刻本文なのか電子データなのかという結果としての形はとりあえず問題ではない。ここに壮大な研究プランが設定されなければならなくなってくることは、大方のご理解の及ぶところと思う。

ところが、国文学において本文研究の姿はどうかというと、これは一人一人の研究者が個別に個別の作品について研究していて、まず、意見を合わせることはない。かりに意見を合わせるにしても、お互いに相手の考えを尊重することが中心で、意見を合わせることによる研究の深化はあまり期待できない。こういう考え方が正しいとするならば、提供されるべき本文は比較的深く個別の作品を研究していると評価できる研究者に意見を聞くことで良いということになる。

そこで、個別の作品についての底本は確定できるとして、全体の企画プランが大事

になってくる。物語ならどれどれ、歌書ならどれどれと作品の全容リストを作り上げる必要が出てくる。そしてさらに、それぞれについて、書籍が求められるか電子データか、影印か活字か、などが決められる必要が出てくると思われる。

本文が提供される最終の形を実現するには技術を必要とする。電子データもプレーンテキストかフルテキストデータベースかによって必要とされる技術は異なり、取り組みようによってはかなり高額の予算が必要となる。

さらに、本文を提供するのに必要なことは、校正を中心とするマンパワーの充実である。老巧な熟練した研究者とともに若い根気のあるパワーが十全に用意され、誤りのないデータの提供を心がけなければならない。

コンピュータの性能が格段に進んだ今日の状態にあっては、まずは、電子化された本文を使つての研究で成功したいものである。国立時代の国文学研究資料館のデータベース室が取り組んできたのは、まさに、電子化部門での可能性の追求であったといつてよい。法人化して、研究機関となって、本文共有化の研究プロジェクトを立ち上げたが、そこでは視野を拡大しつつも、やはり、電子化を強く追求することになったのは、故なきことではないのである。

国立時代にあったデータベース室は、パソコンを図書館にし、そこに電子化された本を並べて持ち歩けるようにしようとした。今やハードディスクは数百ギガの時代になったから、一定のルールに従って電子化されさえすれば、自分の書齋に必要な本は全部ノートパソコンに入る。国文学研究の進展はかなりのスピードアップが図れる。

検索システムをインストールすることで

パソコンが図書館になる。そのことは、今、可能になっている。国文学研究資料館が法人化されてほぼ落ち着いてきたから、この検索システムはどなたでもインストールできるようにしていかなければと思っている。図書館の本すべてが検索でき、検索結果はリスト化できる。

本文共有化研究プロジェクトが取り組んだ作品は、平成16年度が『扶桑拾葉集』の仕上げ、平成17年度が『夫木和歌集』の仕上げである。実は、仕上げ工程はデータベース作りの最後の一年で、その前に三年かかる。予算の事情で、『夫木和歌集』の仕上げはかなりの無理が発生した。

こうしてできた、電子化された本（フルテキストデータベース）は、すべて一つの検索システム上で動く。このルールを、いま、国際標準として進んでいるXMLにするべきだという意見がある。そうすること自体は簡単なのだが、私は今のルールのままのほうが、国文学を勉強する一般の方には分かりやすく取り組みやすいと考えている。このシステムはどう頑張っても日本語が使えるパソコンでしか有効でない。国際標準を意識しておく意味を考えていくなれば、利用漢字システムの対応なども国際化を意識する必要がある、検索システムもさらにお金をかけなければならない。国文学研究資料館にはその予算がない。

さて、こうしてできたデータベース『扶桑拾葉集』は『源氏物語』（絵入）『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』『古事記』『出雲国風土記抄』と一緒に使えるし、安永教授が用意された岩波書店の旧古典大系も少し変更するだけで利用することができる。

『夫木和歌集』は二十一代集データベースと一緒に使えるほか、新編国歌大観の本文もテキストデータ化できれば一緒に使う

ことができる。

この検索システムは、さらにいろいろな工夫した使い方ができるのだが、とりあえず、パソコンを図書館にする機能だけでも、相当、研究者の皆さんの役には立つものと思う。

この研究プロジェクトが最後に取り組んだ『夫木和歌集』のデータベースはパラレルに3本の本文を並べ、『夫木和歌集』という作品の難しさをお目にかけたが、同時に、未だほとんど利用されていない『夫木集溪雲抄』（九州大学蔵）という注釈書も活字で提供申し上げた。この本を見つけ、提供を志したのは研究員松本智子である。記して、その営為を讃えたい。

（文責：中村康夫）